

## 乳幼児用身体接触尺度の作成

森田 晃成<sup>1</sup>・清水 寿代<sup>1</sup>

### The development of maternal touch scale for infant and toddler.

Akinari MORITA<sup>1</sup>, Hisayo SHIMIZU<sup>1</sup>

**Abstract:** The importance of physical contact in child care has been the focus of much attention. The purpose of this study was to create a questionnaire scale focusing on the content aspect of maternal touch. In Study I, parent-child physical contact was observed for 10 minutes in a playground setting. As a result, 74 maternal touch contents were obtained. In Study II, a survey was conducted with mothers of children aged 0 and 1 year. A total of 249 mothers responded to the survey; 159 mothers' responses were analyzed. The survey included maternal touch, infant behavior, maternal parenting stress, and maternal depression. The results showed that the maternal touch scale was classified into eight categories: firm touch, holding, vestibular stimulation, holding hands, holding on the lap, light active touch, clerical touch, and passive touch. The maternal touch scale was positively correlated with infant behavior, but was not correlated with the other scales. The lack of association between the maternal touch scale and parenting stress and depression may be due to the relatively high mental health of the mothers who participated in this study. Therefore, further study is needed regarding the validity of the maternal touch scale.

**Key words:** maternal touch, scale, mother-child interaction, infant and toddler, validity

### 目 的

養育における、抱っこや手をつなぐといった親と子どもの肌の触れ合いによる親密な交流は、身体接触と呼ばれている。Harlow (1958)の研究において、コンタクトコンフォート（接触の快）が、愛着形成に大きな影響を及ぼすことが示されている。これは、それまで主流であった一次的欲求を満たす対象に愛着形成が生じたとした二次的動因説への批判となった。

この研究以降、養育における身体接触の重要性が注目され、身体接触に関する研究が多くなされてきた。例えば、山口 (2003) では、乳児の母子の身体接触が児童期だけでなく思春期に

わたってもその子の攻撃性に影響を及ぼすことを示唆している。また、Takeuchi, et al. (2010) は、幼少期の親からの身体接触が青年期後半から成人期前半にかけての抑うつや愛着の発達に大きな影響を与えることを示している。このようにこれまでの身体接触研究の多くは親子間の身体接触が子どもに及ぼす影響を検討している。

一方、身体接触を主に行う側である親にも身体接触の効果が生じ得ることは明らかにされている。例えば、渡辺 (2013) では、産後1ヶ月から子どもの身体にそっと手を置くホールディングや身体へのゆっくりとしたマッサージなどからなるタッチケアを「20日以上」または「1日10分以上」継続して行うことで育児不安が低減するということが示されている。さらに、伊藤・笠置 (2016) では、ベビーマッサージが親

1 広島大学大学院人間社会科学研究所

の児に対する愛着、対児感情、親のメンタルヘルスに有効であることを示している。

しかしながら、これまでの研究では、ベビーマッサージやタッチケアなどの特定の身体接触に関する研究が多く、普段の養育場面で生じる身体接触やどのような身体接触が子どもの行動や親のメンタルヘルスと関連するかについての検討はあまりされていない。

普段の養育場面における身体接触の内容的な検討を行うにあたって、これまで用いられてきた身体接触尺度を見てみると、山口 (2003) では独自に作成した1因子9項目からなる尺度を使用し、頻度を尋ねるといった形をとっている。また Katsurada (2012) でも独自に作成した1因子20項目からなる尺度を使用し、頻度を尋ねるといった形をとっている。さらに Takeuchi, et al. (2010) では、これまでの身体接触経験を尋ねるにあたって、時期と対象をいくつか想定させ、それぞれに対して身体接触を受けた頻度を「全くない」から「非常によくある」の10件法で回答する形をとっていた。このように身体接触に関する研究において、質問紙を用いた一貫した尺度は用いられておらず、また身体接触の頻度のみを扱っており、その内容的な側面までは検討できていないものが多い。

一方で、身体接触の内容的側面についても検討した研究としては Ferber, et al. (2008) の研究がある。この研究では、生後1年までの乳児とその親を対象に観察を行い、母子間の Touch (身体接触) を3つのタイプに分類した。1つ目は Affective touch である。Affective touch は、さらに Holding, Light active touch, Passive touch からなり、Holding は腹側-腹側、腹側-背側、またはその他の形で、愛情をもって慰める、抱きしめる、抱きしめられること、Light active touch は愛情を込めたキスや愛情をもってなでること、Passive touch は子どもに触れている手を休ませるなど受動的な接触のこととしている。2つ目は Stimulating touch である。Stimulating touch は、Firm touch, Proprioceptive touch, Vestibular touch からなり、Firm touch は手全体でしっかりなでる、くすぐる、つつく、マッサージすること、Proprioceptive touch は母親によって子どもの四肢を屈伸させること、Vestibular touch は子どもを持ち上げる、滑らせる、回転させるなどで体勢を変えたり、ゆっくりと揺らしたりと感覚における体の向きを変えるような動きのこととしている。3つ目は Instrumental touch であ

る。Instrumental touch は Matter-of-fact touch からなり、Matter-of-fact touch は子どもの口を拭いたり、子どもの手をおもちゃに誘導したりするような目的を持った実用的な接触のこととしている。この身体接触の分類を基に、Tanaka, et al. (2021) は身体接触から乳児の人や物に対する行動反応への影響を検討したところ、特に Affective touch が乳児の他者への回避行動や物体探索を調節する役割を持つことが示された。このように身体接触はその内容によって子どもへの影響が異なると考えられるため、身体接触を検討する上で内容的側面への着目は必要であると考えられる。

以上のことを踏まえ、本研究では身体接触の内容的な側面にも着目した質問紙尺度を作成することを目的とする。これにより、これまで頻度のみに着目してきた身体接触の質問紙尺度に対し、その内容的な側面にも着目した質問紙尺度を作成することで、身体接触に関するより幅広い検討を可能にする。

## 研究 I

### 方法

**調査対象** 広島県にある子育て支援センターを利用する母子を対象とした。15名が参加し、身体接触が全く見られないなどの不十分なデータを除いた13名のデータを分析に用いた。母親の平均年齢は33.6歳 (27歳-46歳) で、1名年齢不詳であった。子どもの平均月齢は15.4ヵ月 (10ヵ月-22ヵ月) であった。子どもの性別は男児9名 (69.2%)、女児4名 (30.8%) であった。  
**手続き** 事前に子育て支援センターを通して書面上で研究内容の説明を行い、研究への同意を得た。「お子さまとお母さまの関わり場면을撮影させていただきます」という教示を行った後、ビデオカメラでの母子関わり場面の撮影を開始した。1人当たりの撮影は間に小休止を挟み5分ずつ、計10分間行った。

**調査時期** 2022年10月14日に子育て支援センターへ調査依頼書の掲示を依頼し、同年11月に計6日に分けて観察を行った。

**倫理的配慮** 参加者への倫理的配慮として、得られた個人情報や映像は研究以外の目的で使用することはないことを調査依頼書に記載し、研究承諾書において「承諾します」を選択した参加者のみ観察を行った。万一観察を通して苦痛を与えてしまった場合の苦情・相談窓口として、調査実施者の名前と連絡先、指導教員の氏名を

記載した。また、得られた映像や個人情報に関するデータはパスワードを設定したUSBメモリに保存し、USBメモリは厳重に保管した。

## 結果

**調査対象者の概要** 母親の年齢については、27歳から46歳で平均年齢は33.6歳であった。なお、1名無回答であった。子どもの月齢については、10ヶ月から22ヶ月で平均月齢は15.4ヵ月であった。子どもの性別については男児9名、女児4名であった。

**身体接触内容** 観察された母子関わり場面における身体接触内容のワーディングを行った。その際、協力者1名に映像を確認してもらい、ワーディング内容が観察内容と合致しているかの検討を行った。その後3名の別の協力者にワーディング内容を確認してもらい、文意が通じるかを確認してもらった。結果77つの身体接触内容が記述され、それらを項目として用いることとした。

## 研究II

### 方法

**調査対象** クラウドソーシングサービス「クラウドワークス」で参加者を募集した。0から1歳の子どもの持つ母親を対象とし、249名が回答した。そのうち回答に不備のあったものを除く200名のデータを分析に用いた。

母親の平均年齢は32.70歳、 $SD=5.00$ であった。母親の就業形態は、フルタイム18名(9.0%)、フルタイム(育児休暇取得中)40名(20.0%)、パートタイム25名(12.5%)、パートタイム(育児休暇取得中)12名(6.0%)、専業主婦98名(49.0%)、フリーランスなどその他7名(3.5%)であった。子どもの平均人数は1.58人、 $SD=0.74$ であった。子どもの平均月齢は13.0ヵ月、 $SD=5.97$ であった。子どもの性別は、男児97名(48.5%)、女児103名(51.5%)であった。子どもの通園施設は、保育園49名(24.5%)、認定こども園11名(5.5%)、通っていない138名(69%)、一時預かり利用などその他3名(1.5%)であった。

**調査時期** 2023年4月11日に募集を開始し、同年4月15日に募集件数に達したため締め切った。

**調査内容** (1) 属性：親の年齢、就業形態、子どもの人数、対象となる子どもの月齢、性別、通園施設を尋ねた。

(2) 身体接触：研究1で得られた77項目を使用した。

(3) 乳児の行動：中川他(2009)の乳児の行動のチェックリスト(IBQ-R)のうち「恐れ」「注意の持続」「不機嫌からの回復のしやすさ」「悲しみ」「期待して接近する」「接触を好む」の6つの下位尺度、計36項目を使用した。恐れは「よく知らない大人と顔を合わせた時、親にしがみつづく」など、注意の持続は「本または雑誌に載っている絵や写真を2～5分間ずっと見ている」など、不機嫌からの回復のしやすさは「夜、寝る時、10分以内に寝る」など、悲しみは「寝かせようとしても寝たがらない」など、期待して接近するは「欲しいおもちゃを見かけた時、それをもらおうととても興奮する」など、接触を好むは「ゆずられたり、抱きしめられた時、しきりに離れようとする」などから構成される。「お子さまに関する質問です。各項目についてあなたのお子さまは、それぞれの場面での様子が、この1週間にどれくらい見られましたか。」という教示文に対し、各項目を提示し、7件法(1.全く見られなかった～7.いつも見られた)で回答を求めた。

(4) 育児ストレス：佐藤他(1994)の育児ストレス尺度を使用した。「母親関連ストレス」「子ども関連ストレス」の2つの下位尺度、計21項目からなる。母親関連ストレスは「どう接すれば良いか分からない」など、子ども関連ストレスは「夜泣きがひどい」などから構成される。「育児の悩みに関する質問です。普段の育児についてそれぞれの項目はどの程度あなたの悩みになっていますか。」という教示文に対し、各項目を提示し、4件法(1.全く悩んでいない～非常に悩んでいる)で回答を求めた。

(5) 母親の抑うつ：Zungの抑うつ尺度(SDS)日本語版(福田・小林, 1973)を使用した。項目は「普段は何でもないことが煩わしい。」など20項目から構成される。「この1週間のあなたのからだや心の状態についてお聞きいたします。」という教示文に対し、各項目を提示し、4件法(1.1週間で全くないか、あったとしても1日も続かない～4.週のうち5日以上)で回答を求めた。

**倫理的配慮** 参加者への倫理的配慮として、回答は任意であり途中で回答を辞めても回答者に不利益は生じないこと、データは統計的に処理されるため個人が特定されることはないこと、得られた回答は研究以外の目的で使用することはないことをアンケートの最初のページに記載し、「同意する」を選択した参加者のみアンケート

トに回答することができた。万一回答者に苦痛を与えてしまった場合の苦情・相談窓口として、調査実施者の名前と連絡先、指導教員の氏名を記載した。また、ローデータや統計処理を行ったデータはパスワードを設定したUSBメモリに保存し、USBメモリは厳重に保管した。

## 結果

以下の分析には清水(2016)のHAD(Version.18\_002)と統計解析ソフトSPSSを用いた。

**因子分析** まず、身体接触の項目について、対象が乳児であることからまだ立つことが難しい者も含まれていたため、そのような立つことを想定した項目は分析前に削除した。加えて、対象となる子どもの保育施設の通園状況において200人中138人が通園施設なしと回答していたことや、子どもの人数から200名中110名にきょうだいがいないことから、他児との関わりがあまり持っていない状況にいる子どもも含まれていると考えられるため、そのような他児との関わりを想定した項目も分析前に削除した。また、滑り台で遊ぶことを前提とした項目についても、必ずしもその遊具で遊んでいると限らないため同様に削除した。その後、各身体接触項目について平均値と標準偏差を算出した。そして平均±2SDより大きいものを外れ値とみなし、回答に外れ値を含む参加者のデータを除外した。その結果158名のデータが残り、これを以降の分析に用いた。

削除した項目を除く身体接触56項目の因子構造の検討および信頼性の確認のために重みづけのない最小二乗法プロマックス回転で探索的因子分析を行った。因子数はMAPと対角SMC平行分析とともに8因子を提案したためこれを採用した。因子負荷量が.35に満たなかった項目や2因子以上に高い負荷を示した項目、 $\alpha$ 係数を極端に低下させる項目を除外し再度分析を行った。この手順を複数回繰り返し、最終的に29項目が残った(Table 1)。

第1因子は「子どもの注意を引くためにつく」「子どもの体をつつく」など5項目から構成され、Ferber, et al. (2008)の分類を参考に「しっかりとしたタッチ」と命名した。第2因子は「子どもの要求に応じて抱っこしようとする」「子どもの要求に応じて抱っこする」など4項目から構成され、Ferber, et al. (2008)の分類を参考に「抱っこ」と命名した。第3因子は「子どもの体を起こし座った姿勢にする」「子どもが座っ

ていて姿勢が崩れた時、その姿勢を元に戻す」など5項目から構成され、Ferber, et al. (2008)の分類を参考に「前庭刺激」と命名した。第4因子は「子どもの差し出した手に応じて手をつなぐ」「子どもからの要求に応じて手をつなぐ」など3項目から構成され、いずれも手をつなぐことに関する項目であることから「手をつなぐ」と命名した。

第5因子は「子どもをひざの上に座らせる」「子どもをひざの上で抱っこする」の2項目から構成され、どちらもひざ上での接触であることから「ひざ上抱っこ」と命名した。第6因子は「子どもの背中を優しくたたく」「子どもの体をさする」など4項目から構成され、Ferber, et al. (2008)の分類を参考に「軽い能動的タッチ」と命名した。第7因子は「子どもの顔に付いた汚れを取る」「子どもの鼻水を拭く」など3項目から構成され、Ferber, et al. (2008)の分類を参考に「事務的タッチ」と命名した。第8因子は「無意識に子どもの体に触れている」「子どもの差し出した手に指を添える」など3項目から構成され、Ferber, et al. (2008)の分類を参考に「受動的タッチ」と命名した。

この8つの因子構造について適合度指標を検討するために確認的因子分析を行ったところCFI=.86, RMSEA=.05, SRMR=.07で、CFIがやや低いものの許容範囲であると判断して採用した。各因子のCronbachの $\alpha$ 係数は「しっかりとしたタッチ」が $\alpha=.79$ 、「抱っこ」が $\alpha=.77$ 、「前庭刺激」が $\alpha=.76$ 、「手をつなぐ」が $\alpha=.78$ 、「ひざ上抱っこ」が $\alpha=.82$ 、「軽い能動的タッチ」が $\alpha=.70$ 、「事務的タッチ」が $\alpha=.60$ 、「受動的タッチ」が $\alpha=.62$ であった。

各因子に含まれる項目の平均値を算出し、それぞれを尺度得点とした。各因子の平均値は、「しっかりとしたタッチ」は $M=2.98$ ,  $SD=.92$ 、「抱っこ」は $M=4.76$ ,  $SD=.38$ 、「前庭刺激」は $M=3.56$ ,  $SD=.81$ 、「手をつなぐ」は $M=4.64$ ,  $SD=.58$ 、「ひざ上抱っこ」は $M=4.76$ ,  $SD=.45$ 、「軽い能動的タッチ」は $M=4.34$ ,  $SD=.58$ 、「事務的タッチ」は $M=4.46$ ,  $SD=.50$ 、「受動的タッチ」は $M=4.44$ ,  $SD=.57$ であった。

因子間の相関を見ると、「しっかりとしたタッチ」と「前庭刺激」の間( $r=.30$ ,  $p<.01$ )、「しっかりとしたタッチ」と「軽い能動的タッチ」の間( $r=.34$ ,  $p<.01$ )、「しっかりとしたタッチ」と「受動的タッチ」の間( $r=.18$ ,  $p<.05$ )、「抱っこ」と「手をつなぐ」の間( $r=.26$ ,  $p<.01$ )、「抱っ

こ」と「ひざ上抱っこ」の間 ( $r=.40, p<.01$ ), 「抱っこ」と「軽い能動的タッチ」の間 ( $r=.26, p<.01$ ), 「抱っこ」と「事務的タッチ」の間 ( $r=.25, p<.01$ ), 「抱っこ」と「受動的タッチ」の間 ( $r=.32, p<.01$ ), 「前庭刺激」と「事務的タッチ」の間 ( $r=.18, p<.05$ ), 「前庭刺激」と「受動的タッチ」の間 ( $r=.20, p<.05$ ), 「手をつなぐ」と「ひざ上抱っこ」の間 ( $r=.24, p<.01$ ), 「手をつなぐ」と「軽い能動的タッチ」の間 ( $r=.21, p<.01$ ), 「手をつなぐ」と「事務的タッチ」の間 ( $r=.16, p<.05$ ), 「手をつなぐ」と「受動的タッチ」の間 ( $r=.35, p<.01$ ), 「ひざ上抱っこ」と「軽い能動的タッチ」の間 ( $r=.22, p<.01$ ), 「ひざ上抱

こ」と「事務的タッチ」の間 ( $r=.22, p<.01$ ), 「軽い能動的タッチ」と「事務的タッチ」の間 ( $r=.26, p<.01$ ), 「軽い能動的タッチ」と「受動的タッチ」の間 ( $r=.29, p<.01$ ), 「事務的タッチ」と「受動的タッチ」の間 ( $r=.34, p<.01$ ) に正の相関が見られた。また「前庭刺激」と「ひざ上抱っこ」の間 ( $r=.13, p<.10$ ), 「ひざ上抱っこ」と「受動的タッチ」の間 ( $r=.15, p<.10$ ) にも有意傾向ではあるが正の相関が見られた。

**相関分析** 妥当性検討のために身体接触の「しっかりとしたタッチ」「抱っこ」「前庭刺激」「手をつなぐ」「ひざ上抱っこ」「軽い能動的タッチ」「事務的タッチ」「受動的タッチ」の8因子の尺

Table 1 因子分析結果 (重み付けのない最小二乗法・プロマックス回転)

項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8
<b>F1:しっかりとしたタッチ (<math>\alpha=.79</math>)</b>								
子どもの注意を引くためにつく	<b>.81</b>	-.07	-.02	-.05	-.07	-.01	.00	.00
子どもの体をつつく	<b>.64</b>	-.06	.00	.60	-.05	.28	-.08	-.20
子どもの足をつつく	<b>.61</b>	-.16	.03	-.08	.01	.17	.07	-.03
子どもをくすぐる	<b>.60</b>	.13	.00	.06	1.0	-.02	-.16	.05
驚かせるように子どもの体にワッと手を当てる	<b>.47</b>	.08	.12	-.05	-.33	.10	.09	.04
<b>F2:抱っこ (<math>\alpha=.77</math>)</b>								
子どもの要求に応じて抱っこしようとする	-.07	<b>.89</b>	.03	.01	-.10	.00	.13	.01
子どもの要求に応じて抱っこする	-.12	<b>.75</b>	.02	-.04	.07	.06	.05	-.07
子どもからの要求に応じて抱き寄せる	.05	<b>.54</b>	-.03	.09	.15	.07	-.18	.22
親の方から子どもを抱っこする	-.05	<b>.52</b>	.03	-.18	.01	-.03	.06	.20
<b>F3:前庭刺激 (<math>\alpha=.76</math>)</b>								
子どもの体を起こし座った姿勢にする	-.15	.00	<b>.74</b>	.03	.12	.06	-.08	-.01
子どもが座っていて姿勢が崩れた時, その姿勢を元に	-.10	-.20	<b>.66</b>	-.07	.11	-.03	.01	.24
子どもを持ち上げ床に座らせる	.09	.20	<b>.60</b>	-.01	.00	-.04	.04	-.13
子どもを持ち上げ姿勢を正す	.14	-.03	<b>.58</b>	.03	-.16	.01	-.09	.07
子どもの体を持ち上げ遊び場につれていく	.23	.19	<b>.54</b>	.02	.01	-.22	.00	-.11
<b>F4:手をつなぐ (<math>\alpha=.78</math>)</b>								
子どもの差し出した手に応じて手をつなぐ	-.07	-.04	.05	<b>.95</b>	-.10	.05	.07	-.08
子どもからの要求に応じて手をつなぐ	.08	-.07	-.02	<b>.70</b>	.02	-.10	.02	.03
子どもと手をつなぐ	.00	-.05	-.04	<b>.67</b>	.06	-.05	-.08	.13
<b>F5:ひざ上抱っこ (<math>\alpha=.82</math>)</b>								
子どもをひざの上に座らせる	.00	.02	.10	-.05	<b>.87</b>	.04	-.02	-.18
子どもをひざの上で抱っこする	.02	.06	-.02	-.05	<b>.75</b>	.00	.07	.06
<b>F6:軽い能動的タッチ (<math>\alpha=.70</math>)</b>								
子どもの背中を優しくたたく	.03	.01	-.05	-.07	-.01	<b>.66</b>	.14	-.07
子どもの体をさする	.08	-.01	-.09	-.01	.09	<b>.64</b>	-.10	.09
子どもの背中をさする	.17	.03	.06	-.06	.03	<b>.50</b>	-.01	.15
子どもの頭をなでる	.02	.24	.06	.12	.13	<b>.43</b>	-.01	.03
<b>F7:事務的タッチ (<math>\alpha=.60</math>)</b>								
子どもの顔に付いた汚れを取る	.03	.19	-.11	-.05	.08	.07	<b>.67</b>	-.05
子どもの鼻水を拭く	.08	.15	-.10	.09	-.1	-.14	<b>.55</b>	.04
子どもの顔に付いた物を払う	-.08	-.20	.16	.03	.01	.17	<b>.49</b>	.13
<b>F8:受動的タッチ (<math>\alpha=.62</math>)</b>								
無意識に子どもの体に触れている	.18	.18	-.07	.00	-.08	-.04	-.03	<b>.71</b>
子どもの差し出した手に指を添える	-.08	.03	.10	.04	-.12	.12	.04	<b>.41</b>
子どもの手に手を添える	-.06	.02	.05	.20	-.02	.09	.24	<b>.36</b>
因子間相関	F2	-.03						
	F3	.30 **	.11					
	F4	.01	.26 **	.02				
	F5	.00	.40 **	.13 +	.24 **			
	F6	.34 **	.26 **	.09	.21 **	.22 **		
	F7	.11	.25 **	.17 *	.16 *	.22 **	.26 **	
	F8	.18	.31 **	.20 *	.35 **	.15 +	.29 **	.34 **

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$

度得点と乳児の行動チェックリスト (IBQ-R) の各下位尺度, 育児ストレス尺度の各下位尺度, SDS 日本語版の尺度得点との相関分析を行った (Table 2)。IBQ-R においては、「恐れ」と「しっかりとしたタッチ」の間に負の相関が見られた ( $r=-.18, p<.05$ )。「悲しみ」と「前庭刺激」の間に負の相関が見られた ( $r=.18, p<.05$ )。「期待して接近」と「抱っこ」「事務的タッチ」の間に正の相関が見られた ( $r=.17, p<.01; r=.16, p<.05$ )。「接触を好む」と「抱っこ」「手をつなぐ」「ひざ上抱っこ」「軽い能動的タッチ」「事務的タッチ」「受動的タッチ」の間に正の相関が見られた ( $r=.22, p<.01; r=.29, p<.01; r=.23, p<.01; r=.22, p<.01; r=.28, p<.01; r=.26, p<.01$ )。また, 有意傾向ではあるが, 「不機嫌からの回復」と「手をつなぐ」の間に正の相関が ( $r=.14, p<.10$ )、「悲しみ」と「しっかりとしたタッチ」「事務的タッチ」の間に正の相関が見られた ( $r=.13, p<.10; r=.13, p<.10$ )。

育児ストレス尺度においては, 「子ども関連ストレス」と「ひざ上抱っこ」の間に負の相関が見られた ( $r=-.19, p<.05$ )。また有意傾向ではあるが, 「母親関連ストレス」と「手をつなぐ」「ひざ上抱っこ」の間に負の相関が ( $r=-.15, p<.10; r=-.15, p<.10$ )、「子ども関連ストレス」と「抱っこ」「手をつなぐ」の間に負の相関が見られた ( $r=-.14, p<.10; r=-.13, p<.10$ )。

SDS 日本語版においては, いずれの身体接触とも有意な相関は見られなかった。

これらの結果から, 作成した身体接触尺度は IBQ-R の「接触を好む」をはじめとした一部と相関が見られたものの, 全体としてはあまり相関が見られなかった。そのため妥当性については十分に高いとは言えず, 再検討が必要である。

## 考 察

本研究の目的は, 身体接触の内容的な側面に着目した質問紙尺度を作成し, 妥当性を検討することであった。

本研究では, Ferber, et al. (2008) の身体接触の3タイプを参考にした, 身体接触の内容的な側面に着目した質問紙尺度の作成を試みた。観察研究を通して得られた身体接触項目について, 調査で得られたデータで探索的因子分析を行ったところ, 「しっかりとしたタッチ」「抱っこ」「前庭刺激」「手をつなぐ」「ひざ上抱っこ」「軽い能動的タッチ」「事務的タッチ」「受動的タッチ」からなる8因子構造が確認された。これは Ferber, et al. (2008) の分類とは異なるものではあったが, 類似した内容を含むものであると言える。具体的には, 「抱っこ」「ひざ上抱っこ」「軽い能動的タッチ」「手をつなぐ」「受動的タッチ」が Affective touch, 「しっかりとしたタッチ」「前庭刺激」が Stimulating touch, 「事務的タッチ」が Instrumental touch に相当すると考えられる。

各下位因子の信頼性については, 「しっかりとしたタッチ」「抱っこ」「前庭刺激」「手をつなぐ」「ひざ上抱っこ」「軽い能動的タッチ」において  $\alpha$  係数が十分な値を示したが, 事務的タッチは  $\alpha=.60$ , 受動的タッチは  $\alpha=.62$  とやや低い値であった。

尺度の妥当性については, 関連が予想される乳児の行動チェックリスト (IBQ-R) の6つの下位尺度, 育児ストレス尺度の各下位尺度, SDS 日本語版の尺度得点との相関分析を行うことで検討した。その結果, 乳児の行動チェックリストの下位尺度の一部との相関は認められた一方で, 育児ストレス尺度, SDS 日本語版との相関はほとんど認められなかった。特に,

Table 2 身体接触と乳児の行動チェックリスト・育児ストレス尺度・SDS 日本語版の相関分析

		しっかりとした タッチ	抱っこ	前庭刺激	手をつなぐ	ひざ上 抱っこ	軽い能動的 タッチ	事務的 タッチ	受動的 タッチ
IBQ-R	恐れ	<b>-.18*</b>	.10	-.06	.03	.03	-.10	.00	-.05
	注意の持続	.00	.09	.11	.10	-.03	-.03	.06	-.03
	不機嫌からの回復	-.06	.10	-.03	.14 <sup>+</sup>	.09	.07	.04	.12
	悲しみ	.13 <sup>+</sup>	.06	<b>.18*</b>	-.06	-.02	.05	.13 <sup>+</sup>	.09
	期待して接近	-.04	<b>.17*</b>	.08	.10	.08	.04	<b>.16*</b>	.06
	接触を好む	.03	<b>.22**</b>	.02	<b>.29**</b>	<b>.23**</b>	<b>.22**</b>	<b>.28**</b>	<b>.26**</b>
育児ストレス 尺度	母親関連ストレス	-.12	-.06	.00	-.15 <sup>+</sup>	-.15 <sup>+</sup>	-.03	.05	-.09
	子ども関連ストレス	-.04	-.14 <sup>+</sup>	-.01	-.13 <sup>+</sup>	<b>-.19*</b>	.00	-.03	.00
SDS	母親の抑うつ	-.05	-.06	-.03	-.02	-.08	.07	.12	.00

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$

麻生・岩立 (2016) の研究から身体接触との負の相関を予測していた母親関連ストレスと親の抑うつについては、すべての身体接触において有意な相関は認められなかった。

このような結果が得られた理由として、麻生・岩立 (2016) においては、特定の身体接触場面における関連を示していた一方で、本研究では場面を限定せず普段の育児場面に関する身体接触を尋ねており、このような条件間に差異があったためである考えられる。また、一般的な養育の中では乳児に身体接触をあまり行わないということは少ないことが予想され、そのため身体接触の尺度得点は高くなりやすく、結果として全体的に相関が出にくかったと考えられる。本研究では十分な妥当性は認められなかったことから、更なる検討が必要である。

#### 本研究の課題

第一に、身体接触尺度の作成における項目の精査が不十分であることが挙げられる。観察研究を基に項目を作成したが、サンプルサイズが13組と小さく、また特定の子育て支援センターでの母子間の関わり場面のみを見ており、普遍的な養育場面における身体接触とは言い切れない部分がある。また、実際に刺激を与える身体接触においては、作成時の意図に反して加害的なニュアンスが含まれた可能性もある。より多くの対象について、家庭での養育場面も含めながら、親子間の関わりにおける身体接触を観察し、項目の改善を行う必要がある。

第二に、作成した身体接触尺度の妥当性が十分に認められていないことが挙げられる。本研究では関連が予想される変数との相関を見ることで検討したが、特に親に関する変数との相関はほとんど見られなかった。渡辺 (2013) において、タッチケアにより育児不安が低減することが示されているように、育児不安など身体接触との関連が予想される他の変数との関連についても改めて検討しつつ、妥当性について明らかにしていく必要がある。

#### 引用文献

麻生 典子・岩立 志津夫 (2016). 乳児に対する母親のタッチの関連要因：初産婦と経産

- 婦の比較 小児保健研究, **75**(2), 187-195.
- Ferber, S. G., Feldman, R., & Makhoul, I. R. (2008). The development of maternal touch across the first year of life. *Early human development*, **84**(6), 363-370.
- 福田 一彦・小林 重雄 (1973). 自己評定式抑うつ尺度の研究 精神雑誌, **81**, 777-784.
- Harlow, H. F. (1958). The nature of love. *American Psychologist*, **13**, 673-685.
- Katsurada, E. (2012). The Relationship Parental Physical Affection and Child Physical Aggression among Japanese Preschoolers. *Child Studies in Diverse Contexts*, **2**(1), 1-10.
- 中川 敦子・木村 由佳・鋤柄 増根 (2009). 乳児の行動チェックリスト (IBQ-R) 短縮版の作成 人間文化研究, **12**, 15-25.
- 佐藤 達哉・菅原 ますみ・戸田 まり・島 悟・北村 俊則 (1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究, **64**(6), 409-416.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**, 59-73.
- Takeuchi, M. S., Miyaoka, H., Tomoda, A., Suzuki, M., Liu, Q., & Kitamura, T. (2010). The effect of interpersonal touch during childhood on adult attachment and depression: A neglected area of family and developmental psychology?. *Journal of Child and Family Studies*, **19**(1), 109-117.
- Tanaka, Y., Kanakogi, Y., & Myowa, M. (2021). Social touch in mother—infant interaction affects infants' subsequent social engagement and object exploration. *Humanities and Social Sciences Communications*, **8**(1), 1-11.
- 渡辺 香織 (2013). タッチケアが産後1～2ヵ月の母親の愛着・育児不安・母子相互作用に及ぼす影響 母性衛生, **54**(1), 61-68.
- 山口 創 (2003). 乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響 健康心理学研究, **16**(2), 60-67.